

帰京の憂い

黒岩常祥(植物学教室)

昨年着任早々、広報に何か書くようにという依頼があったが、大学での新しい生活は事他忙しくお断わりし続けているうちに早くも一年が経過した。この間広報を時々目にする機会があり、再度の依頼に負けて、着任後の一年間を振り返りながら、身近に強く感じた事柄について簡単に書くことにした。

1971年に大学院を修了してから15年あまりの間に、地方の研究所、大学と国内だけで3回変わり、東大に戻って4回目の転職となる。この間に東大を訪れる機会が全くなかった訳ではないが、住人となるとお客とは大違いで、これまで気がつかなかった多種多様な問題が山積していることに気づかされ、時には絶望感に襲われることもあった。初めて訪れる友人は研究室を、「汚い建物の中の暗い倉庫のようなところだね」と言って笑う。しかし、かつて一度でも住んだことのある者には、むしろこれらの薄暗く、ひんやりした室内の感触や廊下一杯に並べられた新旧の機器類が大学そのものの存在を感じさせるのではないだろうか。ある時、ふと、これら機器の中の一つ、大きな重量感にあふれる培養器が激しく動いているのに気がついた。大学院修了間近に、研究の展開を計ろうと先生にねだって購入して頂いたものであったが、一度も使用することなく大学を出た。もともと性能もよく、その後の整備も良好であったに違いない。しかし格安で便利な器械が沢山市販されている現在もこの器械が活躍しているとは驚きであった。とは言っても、一度捨てかけた古い備品類をもう2度と誰も使わないと思いつつ、廊下の戸棚へ再びしまひ込む日もある。

現在研究室に分配される校費は年間約200万円であり、これから更に電気代として130万引かれるから、実質的な校費は僅か70万円程になってし

まう。どの大学も校費はこのように少ないのだろうか。15年前に赴任した博士過程のない、教授1、助教授1、助手1の地方大学の研究室に配分された実質の校費は約150万円であったから、物価指数の激しい上昇を考えると大学の研究費が著しく減額されていることになる。

植物科学はその重要さにもかかわらず、扱いの難しい地味な博物学的科学と思われてきた。しかし植物細胞の中にある原色素体から分化した葉緑体が無機物から炭水化物やアミノ酸を合成したり、またアミロプラストがデンプンを蓄積し、過去から現在に至るまで人類の生存のための殆ど全ての燃料と食料を供給してきたことを考えるならば、植物細胞の構造と機能、そしてその分化の問題を扱う基礎植物科学の重要性は明らかである。ことにこの十年間に遺伝子操作を基盤とした植物科学は歴史的、革命的展開をみせ、欧米では公的私的な大きな研究所が次々と建設され、既に研究上の劇的な展開をみせ、多くの成果をあげるに至っている。が、わが国ではこの分野は著しく立ち遅れている。しかしこうした研究動向に対応し、それに立ち向かうことができる研究者の基礎教育をなんとしても遂行せねばならない。こうした教育、研究には、生物の育生・培養をはじめ、制限酵素やモノクローナル抗体等の最低限の使用は必須であるが、これがあまりにも単価が高く購入を困難にしている。また、校費の相当額が古くなった機器の修理費にまわるため、新しい教育に必要な器具、薬品の購入は校費では不可能にちかい。折角優秀な学生を迎えることができても、十分な教育の準備ができないのはなんとじれったいことか。この研究費の問題に関しては、私の前任者の古谷雅樹名誉教授も広報18巻「後顧の憂い」で述べておられる。

さて実験科学者が東大において研究、教育を行おうとする時、極めて不利な条件が他にもある。それは15年前とは比較にできぬ程劣悪になってしまった住宅事情である。私は実験研究者にとって必要なものは研究費と時間と健康と頭脳の閃きであり、いずれが欠けても研究者としてたち行くことが難しいと考えている。欧米のように技術員制度が発達し、研究者と同じ位の数の技術員をおく大学や研究所にあっては、研究者もある程度時間的なゆとりをもって研究と教育に専念することが出来るのである。しかし、日本のような技術員制度の貧困なところでは、実験に関する総てを本人が行わなければならない。そのため我々のような分野では研究活動に要する時間は洗い物の時間をふくめると1日14時間と長時間になることも多い。このようにして研究を行い、これから独自の研究

活動を繰り広げようとしている最も働き盛りの助手、講師の方々にとっては研究費のみならず研究時間があまりにも足りない。しかし助手、講師の方で大学に近い宿舎に入れる人はまずいないと聞く。学生達のアパートも年々大学から遠ざかってきている。長時間かけて大学に通うようでは、研究の方がやはり疎かになるのは当然のことであろう。私が過ごしてきた地方の大学、研究所では、大学から宿舎まで自転車で5分位であり、夕飯をとってから深夜まで研究を続けることが可能であった。東大においてもなんとか30分以内のところ若い教官のためにゆとりをもった宿舎を設けることは出来ないものであろうか。本郷の近くに超高層ビルの教官宿舎があってもよいのではなかろうか。これが実現するだけでも教育、研究活動は一段と活発になるに違いない。